Institute for Research in Humanities
Kyoto University

Scuola Italiana di Studi sull'Asia Orientale
ISEAS

École Française d'Extrême-Orient
EFEO

特別講演会

Turanians of Asia
Myths and the Missing Race

Prof. Vimalin Rujivacharakul
（デラウェア大学）

京都大学人文科学研究所本館１階セミナー室１
2019 年 7 月 26 日（金）午後 6 時

18 世紀から 20 世紀初頭にかけて、ヨーロッパ人たちは Turanian と呼ばれる謎の民族の起源を必死で探し求めた。今日ではほとんど知られることがないが、Turanian は、かつてはアルタイ山脈から古代中央イタリアのエトルリアに到る広大な地域に住んでいた人々で、おそらくは彼らの影響によって今日の世界が形作られたのだと信じられていたのである。言語学者 Friedrich Max Müller は彼らを、アーリア人の言語要素を汚染した要因そのものと見なし、人類学者 James Cowles Prichard は、彼らが北東アジア、中央アジア、内陸アジア、東ヨーロッパの近代以降の住民たちの祖先の１つであったとし、建築史家 James Fergusson は、ギザの大ピラミッドを含むほとんど全ての古代遺跡を Turanian の永続する記念碑と考えた。しかしながら彼らの歴史的存在についての記録――多くの口伝や、中世ペルシアの詩人が Shahnameh に彼らについて書き記し、ロンドンの水晶宮のガイドブックが彼らを最も有力な民族として追認したこと――にもかかわらず、Turanian が正確にどのような人々であったのか、そもそも彼らは存在したのかどうか、誰も知らないのである。

本講演では、知性史、建築史、および人類学の歴史という多様な視角を組み合わせて、この謎の種に迫る。Turanian の歴史が上掲の二世紀の間に、様々な歴史研究の融合を通じてどのようにして形成されたのか、想定された彼らの存在は、ヨーロッパとアジアの分断という規範をどのように乗り越えたのかを論じ、また、東洋言語学者たちの初期の仕事と、人種概念の歴史的構築との関連の考察を経て、Turanian 研究が大戦後に消滅するという結論へと到る。

Vimalin Rujivacharakul 博士はカリフォルニア大学バークレー校で学位を取得し、建築史と知性史、および文化人類学を結びつける研究を行いつつ、建築史と歴史記述、中国＝ヨーロッパの知性史、地図学史、蒐集の歴史について多くの成果を世に問うている。博士は、プリンストン高等研究所 (IAS) やゲッティ研究所、ニーダム研究所、グラハム基金、蔣経国国際学術交流基金、ポール・メロン・センター、テラ基金等々の fellowship を得て研究を進めてきた。現在の関心は、現代世界の建築に関する言説が、視覚表現や文章表現を通じてどのように形成されてきたかを検証することにある。J. Ritchie Garrison 教授とともに、アジア的美学とアメリカ的物質文化に関する複数機関からなる研究プロジェクトを代表している他、フリーア・サクラー / スミソニアン・アジア美術館が組織する美術品研究ワークショップのインストラクターをも務めている。博士はデラウェア大学で終身職を持ちつつ、2018-2021 年の間、清華大学建築学科の客員教授の任にもついている。

問い合せ：京都大学人文科学研究所　稲葉穣 (075-753-6968)